

イギリス所蔵の西夏語『佛頂心大陀羅尼經』 の翻訳・解釈と関連する諸問題*

崔 紅芬**著・松森秀幸***訳

疑偽經『仏頂心大陀羅尼經』は、正確には『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』と呼ぶ。本書は上・中・下巻の三巻に分かれているが、各巻の名称は異なっている。すなわち、この三巻はそれぞれ『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』巻上、『仏頂心觀世音菩薩治病催生法經典』巻中、『仏頂心觀世音菩薩前往難救經典』巻下と名づけられている。敦煌¹・黒水城・山西応県木塔²・房山石經³のいずれにも残されており、漢語・西夏語、ウイグル語⁴などの異なる版本がある。黒水城出土の西夏語『仏頂心大陀羅尼經』が最初に収録された『西夏文写本と刊本』には、十数個のテキストがあり、『仏頂心觀世音菩薩』・『仏頂心觀世音菩薩患医生断法經』・『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』・『仏頂心陀羅尼經』などの名称が残るが、巻号の標識はない⁵。その後、クチャーノフ編著『俄蔵黒水城：西夏語仏教文献部分』に収録されたが、両者に収録するテキストにも相違がある⁶。近年、張九玲がロシア所蔵西夏語『仏頂心大陀羅尼經』の出土・残存の情況について概略的に紹介し⁷、さらに敦煌の漢語本を参照して第908号の西夏語本に対して翻訳・解釈、校注を行った⁸。本稿は、先行研究に基づき、イギリス所蔵西夏語『仏頂心大陀羅尼經』に対して翻訳・解釈を行い、合わせて関連する問題について考察する。

*原題「英藏西夏文《佛頂心觀世音菩薩陀羅尼經》译釋及相关問題考略」

**河北師範大学歴史文化学院教授。

***創価大学比較文化研究所准教授。

1. イギリス所蔵黒水城西夏文『仏頂心大陀羅尼經』の 現存状況

『英蔵黒水城文献』（5冊）において、Or. 12380-2102RV (K. K. II. 0243. e)、Or. 12380-3875 (K. K.), Or. 12380-3025 (K. K. II. 0234. b) の三つだけが、刊行者によって『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』と命名されるが、全5冊のイギリス所蔵の西夏語仏經教文献全体を整理してみると、その他にまだ命名されていない、あるいは命名が間違っている残經で、また『仏頂心大陀羅尼經』であるものが存在している。以下にそれぞれの収録文、翻訳・解釈、ならびに残葉の版式、字数などについて紹介する。

(1) Or. 12380-2102RV (K. K. II. 0243. e) の残經について、刊行者は『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』と命名している⁹。この写本は、2頁16行が残っており、右の残葉の上には2101号とある。この中で左には5行があるが、右の前5行とひっついて一緒になっており、左の5行は右5行がひっくり返った文である。一行の文字数は17~19字で異なっており、残葉の右2行の下部に残欠があり、上下に横の枠線がある。残欠の内容はロシア所蔵館冊第105号の翻刻によって次のように補う。

𐰽𐰺𐰠𐰪𐰩𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿
 𐰽𐰺𐰠𐰪𐰩𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿

𐰽𐰺𐰠𐰪𐰩𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿
 典供養者大千界福得此大悲法彼人世界^{中大}

𐰽𐰺𐰠𐰪𐰩𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿⁰
 成就得若及善男子善女人若早晨時面仏前

𐰽𐰺𐰠𐰪𐰩𐰣𐰤𐰥𐰦𐰧𐰨𐰩𐰪𐰫𐰬𐰭𐰮𐰯𐰰𐰱𐰲𐰳𐰴𐰵𐰶𐰷𐰸𐰹𐰺𐰻𐰼𐰽𐰾𐰿¹¹
 面去妙香好燒是陀羅尼經典誦千遍滿故時

觀世音菩薩阿難身像化作明証為見問言如

何報以需要說願依悉皆成就令能身口意業

消除仏三昧頂灌智力波羅蜜地勝殊力依滿

須臾
足獲得

仏頂心觀世音菩薩經典上卷 終

仏頂心觀世音菩薩病治生催法經典中卷

及假若諸女人一切子腹入襟寬闊十月滿足誕
(以下の西夏字は右の残葉の1-5行がひっくり返った文であるので、
収録しない)

刊行者はOr. 12380-2102RV (K. K. II. 0243. e) の残葉を正しく命名して
いるけれども、かなり曖昧である。この内容は『仏頂心觀世音菩薩經典』
上巻の末尾の箇所と『仏頂心觀世音菩薩治病催生法經典』中巻の冒頭の内
容であろう。翻訳は次の通りである。

応得具足轉輪王福。若人以香花供養此陀羅尼經典者，得此大千界福、
大悲法，彼人得世界中大成就。若及善男子、善女人者，早晨時至仏前
燒妙好香，誦是陀羅尼經典千遍滿，故時見觀世音菩薩，化作阿難身像

為証明，問言所需要如何報？依願悉皆成就，令能消除身口意業，獲得
仏三昧頂灌智力波羅蜜地勝殊力，依満果遂。『仏頂心観世音菩薩經典』
上卷 終

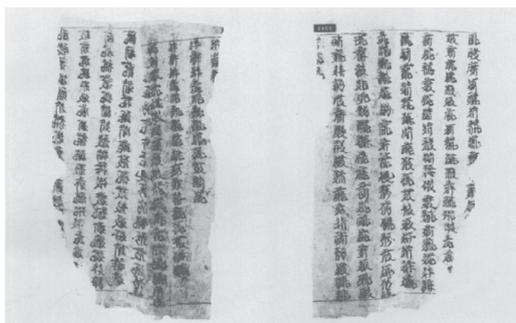
『仏頂心観世音菩薩治病催生法經典』中卷

又仮若一切諸女人身懷六甲満十個月，誕生……

(応に転輪王の福を具足するを得るべし。若し人、香花を以て此の陀
羅尼經典を供養せば、此の大千界の福・大悲の法を得て、彼の人、世
界の中の大成就を得。若し善男子・善女人に及ばば、早晨の時、仏前
に至って妙好の香を焼き、是の陀羅尼經典を誦すること千遍満、故に
時に観世音菩薩を見て、阿難の身像と化作するを証明と為し、問うて
『所需要、如何が報なるや』と言う。願に依りて悉皆く成就し、能く
身口意の業を消除せしめ、仏三昧頂灌智力波羅蜜地勝殊力を獲得する
こと、果遂を満ずるに依る。『仏頂心観世音菩薩經典』上卷 終わる

『仏頂心観世音菩薩治病催生法經典』中卷

又た仮若し一切の諸女人身懷六甲して十個月を満せば、生まれ……)



Or.12380 - 2102RV (K.K.II.0243.e) 佛頂心観世音菩薩大陀羅尼經

(2) Or. 12380-3025 (K. K. II. 0234. b) の残経について、刊行者は『仏
頂心観世音菩薩大陀羅尼經』と命名している¹²。1頁6行が残り、一行14
字である。写本について、残葉の上に3025号とある。行と行の間に縦の罫

線があつて、字を分けている。上下に横の枠線がある。収録文の翻訳・解
釈は下記の通りである。

𪛗𪛘𪛙𪛚𪛛𪛜𪛝𪛞𪛟𪛠𪛡𪛢𪛣𪛤𪛥𪛦𪛧	鄰人呪罵詈無利尋唯鬼惡損害人
𪛨𪛩𪛪𪛫𪛬𪛭𪛮𪛯𪛰𪛱𪛲𪛳𪛴𪛵𪛶𪛷	家中住橫惱雜令人之方便欲者是
𪛸𪛹𪛺𪛻𪛼𪛽𪛾𪛿𪜀𪜁𪜂𪜃𪜄𪜅𪜆𪜇	陀羅尼經典与遇所住处各供養
𪜈𪜉𪜊𪜋𪜌𪜍𪜎𪜏𪜐𪜑𪜒𪜓𪜔𪜕𪜖𪜗	者諸鬼神皆驚走往損害不敢
𪜘𪜙𪜚𪜛𪜜𪜝𪜞𪜟𪜠𪜡𪜢𪜣𪜤𪜥𪜦	仏頂心觀世音菩薩經典中卷終
𪜧𪜨𪜩𪜪𪜫𪜬𪜭𪜮𪜯𪜰𪜱𪜲𪜳𪜴𪜵	仏頂心觀世音菩薩難救前往經

このOr. 12380-3025 (K. K. II. 0234. b) の残葉は『仏頂心大陀羅尼經』
中巻に対応する内容であると確定することができる。

樓主家隣人，呪罵詈、尋無利，唯鬼惡損害住人家中，令橫雜惱，人欲
之方便者，与遇於住处各供養是陀羅尼經典者，諸鬼神皆驚奔走，不敢
損害。

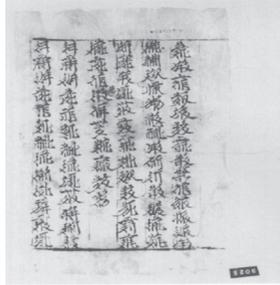
『仏頂心觀世音菩薩經典』中巻終

『仏頂心觀世音菩薩前往難救經』

(樓主家の隣人、詈罵を呪し、利無きを尋ぬるに、唯だ鬼惡、損害し
て人家の中に住して、横に雜惱せしむるのみ。人の之れに方便せんと
欲する者と、住处に遇いて各おの是の陀羅尼經典を供養せん者と、諸
鬼神は皆な驚きて奔走し、敢えて損害せず。

『仏頂心觀世音菩薩經典』中巻終わる

『仏頂心觀世音菩薩前往難救經』)



Or. 12380 - 3025 (K. K. II. 0234. b)
佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經

(3) 西夏語Or. 12380-3493 (K. K. II. 0282. ccc) の残葉について、刊行者は「仏経」などと命名している¹³。この写本は、6行が残り、一行は14字である。残葉の上には3493号とあり、行と行の間に縦の罫線があって文字を分けており、上下には横の枠線がある。収録文については、以下のよう

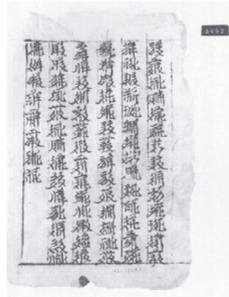
𐰇𐰏𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰏𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰏𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰏𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰏𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰏𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚

守護功德者具所説無説彼城主聞
 故礼敬懺悔速彼和尚於本請自食
 財施人請彼処庭前面千卷写令道
 場中処日夜香花供養彼及後敕出
 官高是經典功德者無量迦無也知

Or. 12380-3493 (K. K. II. 0282. ccc) の残葉を解読すると、これが『佛頂心大陀羅尼經』巻下に対応する内容であると確定することができる。翻訳は以下の通りである。

……守護，功德不可具説。彼城主聞説，故立即敬礼懺悔，於彼和尚請本，破施錢財，請人於殿堂前写千卷，放道場中，日夜香花供養，彼之

後、敕出官高、応知是經典功德者無量無辺。心歛受信、頂戴奉行。
 (……守護、功德は具さに説く可らず。彼の城主、聞説す。故に立即
 ちに敬礼懺悔し、彼の和尚に於いて本を請うて、錢財を施すことを破
 り、人に請うて殿堂の前に於いて千卷を写し、道場の中に放ち、日夜
 に香花もて供養す。彼の後、官高に敕出す。応に知るべし、是の經典
 の功德は無量無辺なり。心に歛び信を受け、頂戴奉行す。)

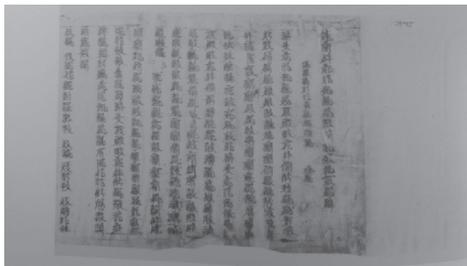


Or.12380-3493 (K.K.II.0282.ccc) 佛經

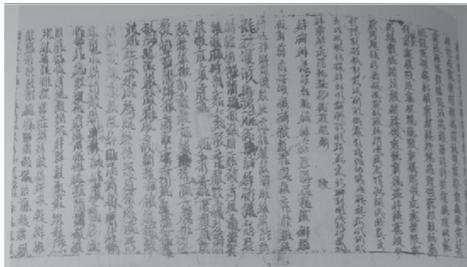
Or. 12380-3025 (K. K. II. 0234. b) とOr. 12380-3493 (K. K. II. 0282. ccc) の残葉と対比すると、二つの残葉が同一の經典であると確定することができるが、両者は連続させることができない。Or. 12380-3025 (K. K. II. 0234. b) は巻中の最後であり、Or. 12380-3493 (K. K. II. 0282. ccc) は巻下の最後である。

(4) 西夏語Or. 12380-3875 (K. K.) 残葉について、刊行者は『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經典』(上卷)と命名しており¹⁵、写本の巻軸装で、各行の字数は等しくない。実際には、Or. 12380-3875 (K. K.) はただ『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經典』(上卷)と名づけることはできない。殘經には中巻と下巻も含んでおり、わずかに末尾に「𑖀𑖂𑖃𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕𑖖𑖗𑖘𑖙𑖚𑖛𑖜𑖝𑖞𑖟𑖠𑖡𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑀀𑀁𑀂𑀃𑀄𑀅𑀆𑀇𑀈𑀉𑀊𑀋𑀌𑀍𑀎𑀏𑀐𑀑𑀒𑀓𑀔𑀕𑀖𑀗𑀘𑀙𑀚𑀛𑀜𑀝𑀞𑀟𑀠𑀡𑀢𑀣𑀤𑀥𑀦𑀧𑀨𑀩𑀪𑀫𑀬𑀭𑀮𑀯𑀰𑀱𑀲𑀳𑀴𑀵𑀶𑀷𑀸𑀹𑀺𑀻𑀼𑀽𑀾𑀿𑁀𑁁𑁂𑁃𑁄𑁅𑁆𑁇𑁈𑁉𑁊𑁋𑁌𑁍𑁎𑁏𑁐𑁑𑁒𑁓𑁔𑁕𑁖𑁗𑁘𑁙𑁚𑁛𑁜𑁝𑁞𑁟𑁠𑁡𑁢𑁣𑁤𑁥𑁦𑁧𑁨𑁩𑁪𑁫𑁬𑁭𑁮𑁯𑁰𑁱𑁲𑁳𑁴𑁵𑁶𑁷𑁸𑁹𑁺𑁻𑁼𑁽𑁾𑁿𑂀𑂁𑂂𑂃𑂄𑂅𑂆𑂇𑂈𑂉𑂊𑂋𑂌𑂍𑂎𑂏𑂐𑂑𑂒𑂓𑂔𑂕𑂖𑂗𑂘𑂙𑂚𑂛𑂜𑂝𑂞𑂟𑂠𑂡𑂢𑂣𑂤𑂥𑂦𑂧𑂨𑂩𑂪𑂫𑂬𑂭𑂮𑂯𑂰𑂱𑂲𑂳𑂴𑂵𑂶𑂷𑂸𑂺𑂹𑂻𑂼𑂽𑂾𑂿𑃀𑃁𑃂𑃃𑃄𑃅𑃆𑃇𑃈𑃉𑃊𑃋𑃌𑃍𑃎𑃏𑃐𑃑𑃒𑃓𑃔𑃕𑃖𑃗𑃘𑃙𑃚𑃛𑃜𑃝𑃞𑃟𑃠𑃡𑃢𑃣𑃤𑃥

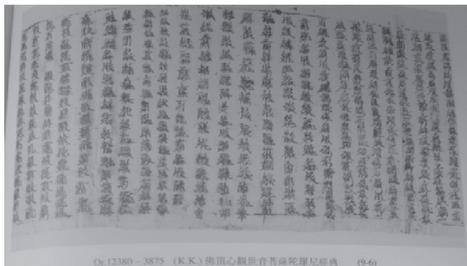
に多いため、ここには収録しないので、別稿を参照してもらいたい。筆跡から判断すると、Or. 12380-3875 (K. K.) の残経は一人の書写ではなく、少なくとも三人の筆跡であろう。卷上は比較的整っているが、その末尾に草書体があるので、二人の筆跡であると見なすことができる。巻中と巻下の前の二つの靈驗譚は、更に別の人の書写であろう。西夏文字がかなり熟れておらず、膨らみがない。第三、第四の靈驗譚の書写者の筆跡は巻上と同一人物である。



Or.12380-3875 (K.K.) 佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經卷上 (9-1)



Or.12380-3875 (K.K.) 佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經卷中 (9-4)



Or.12380-3875 (K.K.) 佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經卷下 (9-6)

(能く一切の結縛を断じ、能く一切の恐怖を滅し、一切の衆生は此の威神の功に依りて、悉く能く苦を離れ解脱す。爾の時、觀世音菩薩、重ねて釈迦牟尼仏に白して言わく、「我れ、今、苦惱の衆生の為めに魔障を滅除し、遇苦の衆生を救いて災無からしめ、自在王智印大陀羅尼法を以て一切の受苦の衆生を救済し、一切の疾病を滅除せんと欲す」と。)



Or.12380-0050 (K.K.II.0283.ggg) 佛經

(6) 西夏語Or. 12380-1099 (K. K. II. 0244. g) 殘經について、刊行者は「仏經」と命名している¹⁸。写本であり、1頁6行が残り、一行は13文字あるいは14文字である。上下に横の枠線がある。収録文は以下の通りである。

禪 瑟 龜 龍 龍 散 散 散 散 散 散 散 散 散
 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散
 散 散 散 散 散 散¹⁹ 散 散 散 散 散 散 散
 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散
 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散
 散²⁰ 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散 散

法說滅令若三宝師主父母前面
 無敬心起若世世生殺命断惡業
 為造若三善月中女嫁媳娶妄衆
 生殺辺無罪大犯自身於聚集世
 日迷冥無知不覺天亦不樂地亦不
 許千仏世出罪懺得不是如罪重人

Or. 12380-1099 (K. K. II. 0244. g) の残経を解説すると、『仏頂心大陀羅尼経』巻上に相応する内容であると確定することができる。翻訳は以下の通りである。

非法説法。若在三宝、師主、父母面前起無敬心（驕慢心），若世世造業，殺生斷命，若三善月中，嫁女、娶妻、妄殺衆生，犯無辺大罪，聚集於自身，整日迷失，不知不覺，天亦不樂，地亦不許。千仏出世，不得懺罪，如是重罪人。

（法に非ずして法を説く。三宝・師主・父母の面前に在りて無敬心（驕慢心）を起こすが若し。世世に業を造り、殺生して命を断ずるが若し。三善月の中、嫁女・娶妻・妄殺の衆生の若きは、無辺の大罪を犯し、自身に聚集して、整日に迷失し、知らず覺らず、天も亦た樂わず、地も亦た許さず。千仏出世するも、罪を懺いるを得ず、是の如き重罪の人なり。）



Or.12380 - 1099 (K.K.II.0244.g) 佛經

(7) 西夏語Or. 12380-1164 (K. K. II. 0247. i) 殘經について、刊行者は「陀羅尼」と命名している²¹。刊本の經折本であり、1折6行が残り、一行は12、13字で、上下に横の枠線がある。現存する収録文の翻訳・解釈は下記の通りである。

𐰽𐰺𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸
 𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸
 𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸
 𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸
 𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸
 𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸𐰽𐰾𐰿𐰸

具足得應若人香花以此陀羅尼
 經典供養者大千界福得此大悲
 法彼人世界中大成就得若及善
 男子善女人早晨時面仏前面去
 妙香好燒是陀羅尼經典誦千遍
 滿故時觀世音菩薩阿難身像

Or. 12380-1164 (K. K. II. 0247. i) 殘葉を解説すると、この殘葉が『仏頂心大陀羅尼經』卷上の内容であるとわかる。翻訳は以下の通りである。

應得具足轉輪王福。若人以香花供養此陀羅尼經典者，得此大千界福、大悲法，彼人得世界中大成就。若及善男子、善女人者，早晨時至仏前燒妙好香，誦是陀羅尼經典千遍滿，故時見觀世音菩薩，化作阿難身像為証明。

(應に轉輪王の福を具足することを得。若し人、香花を以て此の陀羅尼經典を供養せば、此の大千界の福・大悲の法を得て、彼の人は世界の中の大成就を得。若し善男子・善女人に及ばば、早晨の時、仏前に至りて妙好香を燒き、是の陀羅尼經典を誦すること千遍滿、故に時に觀世音菩薩を見て、故に時に觀世音菩薩を見て、阿難の身像と化作するを証明と為す。)



Or.12380 - 1164 (K.K.II.0247.i) 陀羅尼

Or. 12380-1099 (K. K. II. 0244. g) とOr. 12380-1164 (K. K. II. 0247. i) の残葉を比較することによって、この二つのテキストが同じ經典の残存する残葉であって、両者が一連のものではなく、間に7～8折分の差があることがわかるだろう。

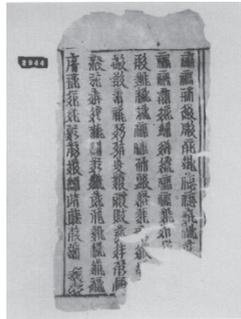
(8) 西夏語Or. 12380-2944 (K. K. II. 0265. e) 殘經について、刊行者は『今号般若波羅蜜多經』と命名している²²。刊本の蝴蝶装であり、各頁に6行があり、一行は14字で、殘葉の上に2944号とある。右面の3行の下部に欠落がある。上下に横の枠線があり、左側には縦の枠線があつて、右側には二重の縦の枠線がある。欠落した西夏文字を館冊第105号によって補うと、収録文の翻訳・解釈は下記の通りである。

禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱
 禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱
 禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱
 禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱
 禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱
 禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱禱

一切滅惡業罪重悉皆離令諸善智
 一切成就速心願一切滿足能煩惱
 障閉衆生一切之利益安樂唯願慈
 悲尋求說樂爾時釈迦牟尼仏言汝
 大慈悲理依速説時觀世音菩薩法
 座上起合掌直立速陀羅尼頌那謨

Or. 12380-2944 (K. K. II. 0265. e) 残經を解説すると、刊行者の命名が誤りであり、その残經の内容は『今号般若波羅蜜多經』ではなく、『仏頂心大陀羅尼經』卷上の内容であるとわかる。翻訳は以下の通りである。

令離惡業重罪，速成就一切諸善智，能滿足一切心願，利益安樂一切衆生，閉障煩惱。惟願慈悲，求尋樂說。爾時，釈迦牟尼仏言：汝大慈悲，依理速說。時觀世音菩薩從法座起，合掌正立，速頌陀羅尼曰：那謨（惡業・重罪を離れ、速かに一切諸の善智を成就し、能く一切の心願を満足して、一切衆生を利益安樂し、煩惱を閉障せしむ。惟だ慈悲を願ひ、樂說を求尋す。爾の時、釈迦牟尼仏言わく、『汝の大慈悲、理に依りて速やかに説く』と。時に觀世音菩薩は法座從り起ちて、合掌して正立し、速かに陀羅尼を頌して曰わく、『那謨』と。）



Or.12380 - 2944 (K.K.II.0265 e)
金剛般若波羅蜜多經

(9) 西夏語Or. 12380-2943RV (K. K. II. 0272. h) 残經について、刊行者は『金剛般若波羅蜜多經』と命名しており²³、刊本の蝴蝶装で、2折が残る。各折に6行があり、一行は14字であり、残經の上に2943号とある。右面に個別の字の欠落があり、左面の残葉の左2行の上部に欠落がある。左外側と右外側に縦の枠線がある。上下に横の枠線がある、左右の内側には二重の縦の枠線がある。

右面：

𑖀𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰²⁴𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹
𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊
𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛
𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫
𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻
𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋
𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛

左面：

𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈
𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛
𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭
𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿
𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛

食財耗散災惡競起宅城不安若諸
商道蓋閉夢幻急流若疾病遇源依
𑖀無者彼扠曉時恭敬心發是陀羅
尼供養誦誦者觀世音菩薩迦無大
威力金剛密跡日夜隨著宿處是人
之守護思念有𑖀者皆願依得円満成

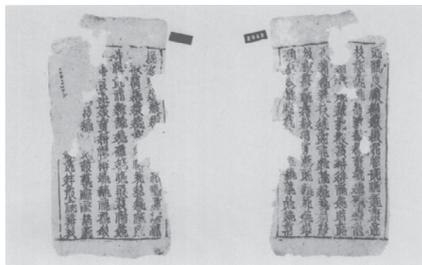
就若善男子善女人一切願求一切
種智成就欲者百獨淨處坐応眼閉
心中觀世音菩薩之念及他不念是
陀羅尼經典七遍念故願依皆得人
一切皆喜樂成諸惡趣一切中不
墮此人若坐若臥常諸仏見眼前面

Or. 12380-2943RV (K. K. II. 0272. h) の残葉を解説すると、その残葉が『金剛般若波羅蜜多經』ではなく、『仏頂心大陀羅尼經』卷上に相應する内容であると確定することができる。翻訳は下記の通りである。

若食財耗散，災惡驟起，宅城不安；若諸商道閉塞，夢幻常生；若常生疾病，無依處者，彼扠曉時，發恭敬心，供養誦誦是陀羅尼者，觀世音菩薩迦，無大威力金剛密跡隨著日夜守護宿衛，是人有思念者，依願皆得円満成就。若善男子、善女人求一切願，欲成就一切種智者，應獨自坐淨處，眼閉心中念觀世音菩薩，及無他念，念是陀羅尼經典七遍，故依願皆得，又皆成一切人之喜樂，不隨一切諸惡趣中。此人若坐若臥，常見諸仏如眼前面。

(若し食財耗散せば、災惡驟起して、宅城安ならず。若し諸商の道閉塞せば、夢幻常に生ず。若し常に疾病を生じて、依處無くば、彼の扠

暁の時、恭敬心を發し、是の陀羅尼を供養し読誦せば、觀世音菩薩の
 辺にして、大威力の金剛の密跡無く、日夜に隨いて守護宿衛し、是の
 人に思念すること有らば、願に依りて皆な円満成就することを得。若
 し善男子、善女人、一切の願を求め、一切種智を成就せんと欲せば、
 応に独り浄処に坐すべし。眼閉じて心中に觀世音菩薩を念じ、及び
 他の念無く、是の陀羅尼經典を念ずること七遍するが故に、願に依り
 て皆な得、又た皆な一切人の喜樂を成じ、一切の諸惡趣の中に随わず。
 此の人、若しは坐し若は臥するに、常に諸仏を見ること眼前面の如し。



Or.12380-2943RV (K.K.II.0272.h) 金剛般若波羅蜜多經

Or. 12380-2943RV (K. K. II. 0272. h) とOr. 12380-2944 (K. K. II. 0265. e)
 の残葉を比べれば、それらが同一の經典であり、Or. 12380-2944 (K. K.
 II. 0265. e) の残葉の内容が前で、Or. 12380-2943RV (K. K. II. 0272. h)
 が後にあって、中間がまた欠落しているとわかる。

(10) 西夏語Or. 12380-1419 (K. K. II. 0277. o) の残經について、刊行
 者は「索借一衫契」と命名している²⁵。写本であり、5行が残る。上下は
 すべて失われており、各行の字数はわからない。上下の縦の枠線は残って
 いない。欠落した西夏文字をロシア所蔵の西夏語館冊第105号によって補
 うと、収録文の翻訳・解釈は下記の通りである。

爾時普光寺院主速已借為一沙弥小所令引

光寺院中常住錢百緡与借請救受於

爾時普光寺院主速已借為一沙弥小所令引

用爾時寺院主速已借為一沙弥小所令引

爾時普光寺院主速已借為一沙弥小所令引

導懷州城中錢取往彼沙弥小立即稅逼者

茲編緡拜稅豎衆處死織衆豎衆豎衆

与共同船上坐水深処至彼夜已宿稅逼

導懷州城中錢取往彼沙弥小立即稅逼者

者人惡心所發彼常住錢債不還欲故引者所令

Or. 12380-1419 (K. K. II. 0277. o) の残經を解説すると、その内容は「索借一衫契」ではなく、『仏頂心大陀羅尼經』卷下であると確定することができる。翻訳は以下の通りである。

故彼泗州普光寺院中請借常住錢百緡，用於受救。爾時，寺院主速已借，令一沙弥小所隨從往懷州城中取錢。彼小沙弥立即與收稅者共同坐船上，深夜至深水処，收稅者所生惡心，不想還彼常住債錢，故所令捕監債者和尚。

(故に彼の泗州普光寺院の中に、常住錢百緡を借り、受救を用いることを請う。爾の時、寺院主、速かに已に借し、一沙弥の小さくして隨從する所をして、懷州城の中に往き錢を取らしむ。彼の小なき沙弥は立即ちに收稅者と共に同じく船上に坐し、深夜に深水処に至るに、收稅者に生ずる所の惡心、彼の常住債錢を還さんと想わず。故に債者の和尚を捕監せしむる所)

(11) 西夏語Or. 12380-1420 (K. K. II. 0277. n) 残経について、刊行者は「陀羅尼」に命名している²⁷。写本であり、5行が残る。上下はすべて失われており、上下の横の枠線は残らず、各行の字数は分からない。欠落した西夏文字をロシア所蔵西夏文館冊第105号によって補うと、収録文の翻訳・解釈は下記の通りである。

𐰽𐰺𐰇𐰏𐰍𐰆𐰃𐰐𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃	一布袋中和尚捕裝水中而擲投令
𐰽𐰺𐰇𐰏𐰍𐰆𐰃𐰐𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃	此監債者和尚七歳為時師依家出常是
𐰽𐰺𐰇𐰏𐰍𐰆𐰃𐰐𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃	仏頂心陀羅尼經典供養不斷直手
𐰽𐰺𐰇𐰏𐰍𐰆𐰃𐰐𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃	与分離未曾乃至処各執持誦誦捨忘
𐰽𐰺𐰇𐰏𐰍𐰆𐰃𐰐𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃𐰏𐰃	未曾故方官為城主殺傷而発毛釐許未

Or. 12380-1420 (K. K. II. 0277. n) の残経を解説すると、その内容を「陀羅尼」と呼ぶことはできず、『仏頂心大陀羅尼経』巻下であるとわかる。翻訳は以下の通りである。

装一布袋中，投入水中。和尚自七歳時，依師出家，常供養是仏頂心陀羅尼經典不斷，曾不離手，乃至各処常執持，不忘誦誦，故方為城主官殺傷而毫髮未損。

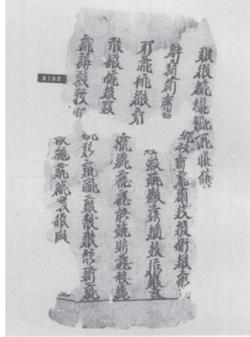
(一布袋の中に装い、水中に投入す。和尚は七歳の時自り、師に依りて出家し、常に是の仏頂心陀羅尼經典を供養すること断つことなく、曾て手を離さず、乃至、各処に常に執持し、誦誦することを忘れざるが故に、方に城主・官に殺傷せらるるも毫髪すら未だ損せず。)

散敵底茲双[解敵隨既視視]夥龜祀敵散數夥戮戮
 十惡五逆闍提誹謗非法法説滅令若三宝師主父
 魏辨殺戮[既解龍義該該]繼羸純殺敵夥龍殺散
 母前面無敬心起若世世生殺命断惡業為造若三

Or. 12380-2132 (K. K. II. 0242. g. &h) の残葉を解説すると、それが『仏頂心大陀羅尼經』卷上に関連する内容であると確定することができる。

天雨宝華，紛紛乱下，為供養，此陀羅尼名薄伽梵蓮花手自在心王印。若善男子、善女人聞此秘密神妙句章，一歷耳根，身中所有百千万苦悉皆消滅。此陀羅尼令滅十惡五逆、闍提、誹謗、非法說法。若在三宝、師主、父母面前起無敬心（驕慢心），若世世造業，殺生断命，若三善月中。

(天雨宝華、紛紛に乱下し、供養せんが為めに、此の陀羅尼を薄伽梵蓮花手自在心王印と名づく。若し善男子、善女人、此の秘密神妙の句章を聞き、一ただ耳根を歴れば、身中所有の百千万の苦、悉皆く消滅す。此の陀羅尼、十惡五逆・闍提・誹謗を滅せしめるや。法に非ずして法を説く。三宝・師主・父母の面前に在りて無敬心（驕慢心）を起こすが若し。世世に業を造り、殺生して命を断ずるが若し。三善月中の若し。)



Or.12380 - 2132 (K. K. II.0242.a & b) 佛經

(13) 西夏語Or. 12380-2761 (K. K. II. 0255. j) 殘經について、刊行者は「仏經」と命名している³¹。刊本の經折装であり、2折で合計12行が残る。各折に6行あり、一行は14字である。この残葉の下部はかなり欠落している。欠落した西夏文字についてロシア所蔵館冊第105号によって補うと、収録文の翻訳と解釈は以下の通りである。

右面：

𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚

就若善男子善女人一切願求一切
 種智成就欲者自独淨処坐忘眼閉
 心中觀世音菩薩之念及他不念是
 陀羅尼經典七遍念故願依皆得人
 一切皆喜樂成諸惡趣一切中不
 墮此人若坐若臥常諸仏見眼前面

左面：

𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚

如無量俱胝諸惡罪過聚集有者皆
 消除令此人者轉輪王福具足得
 応若人香花以此陀羅尼經典供養
 者大千界福得此大悲法彼人世界



Or.12380 - 2761 (K.K.II.0255.) 佛經

(14) 西夏語Or. 12380-3185 (K. K. II. 0265. d) 殘葉について、刊行者は『仏説聖星母陀羅尼』と命名している³²。この残葉は刊本の経折装であり、1折6行が残る。一行は14字であり、収録文の翻訳・解釈は下記の通りである。

𐰇𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚³³
 𐰇𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚
 𐰇𐰣𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚𐰚

經典唯造与同説譬如金黃以仏像
 成者此陀羅尼經典供養威賢力亦
 彼已如及諸善男子善女人樓主家
 鄰人呪罵詈無利尋唯鬼惡損害人
 家中住横惱雜令人之方便欲者是
 陀羅尼經典与遇所住処各供養者

Or. 12380-3185 (K. K. II. 0265. d) の残経を解説すれば、この内容が『仏説聖星母陀羅尼』ではなく、『仏頂心大陀羅尼經』巻中に関連する内容であると確定することができる。

供養此陀羅尼經典威賢力、亦復如是。又諸善男子・善女人・樓主家鄰人、呪罵詈・尋無利、唯鬼惡損害住人家中、令横雜惱、人欲之方便者、与遇於住処各供養是陀羅尼經典者。

(此の陀羅尼經典を供養する威賢の力、亦復た是くの如し。又た諸の

善男子・善女人・樓主家の隣人、詈罵を呪し、利無きを尋ぬるに、唯だ鬼惡、損害して人家の中に住して、横に雜惱せしむるのみ。人の之れに方便せんと欲する者、住処に遇いて各おの是の陀羅尼經典を供養せん者と)



Or.12380 - 3185 (K. K. II.0265. d) 佛說聖星母陀羅尼經

(15) 西夏語Or. 12380-3218 (K. K. II. 0266. k) の残葉について、刊行者は「仏經」と命名している³⁴。この残葉は刊本の蝴蝶装であり、2折12行は残り、各行は14字で、残葉の上に3218号とある。右面の前2行と左面の後3行にはいずれも欠落があり、欠落した西夏文字についてロシア所蔵館冊第105号によって補うと、収録文の翻訳・解釈は下記の通りである。

右面：

概藏薩羅³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵
 禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵
 概藏薩羅³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵
 禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵
 概藏薩羅³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵
 禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵禮³⁵
 概藏薩羅³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵頌³⁵

不見此女人³⁵泪出如雨³⁵如³⁵而³⁵來³⁵菩薩³⁵之³⁵
 礼敬³⁵立即³⁵家³⁵回³⁵心³⁵誓願³⁵發³⁵衣³⁵服³⁵壳³⁵令³⁵
 及³⁵別³⁵書³⁵人³⁵請³⁵千³⁵卷³⁵写³⁵令³⁵受³⁵持³⁵倍³⁵增³⁵休³⁵
 止³⁵未³⁵曾³⁵若³⁵九³⁵十³⁵七³⁵歲³⁵往³⁵死³⁵所³⁵得³⁵秦³⁵國³⁵
 已³⁵生³⁵男³⁵身³⁵得³⁵若³⁵善³⁵男³⁵子³⁵善³⁵女³⁵人³⁵有³⁵是³⁵
 三³⁵卷³⁵經³⁵典³⁵書³⁵能³⁵五³⁵種³⁵雜³⁵絹³⁵以³⁵袋³⁵為³⁵彼

左面：

𑖀𑖄𑖂𑖆𑖃𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕
𑖖𑖗𑖘𑖙𑖚𑖛𑖜𑖝𑖞𑖟𑖠𑖡𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩
𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽
𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑
𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥

經典装仏寺院中処乃至身随供養者此人若坐若臥畏疑有時彼百千那羅延金剛密跡力大有及辺無阿吒鉞拘羅神有身劍輪持所在処各導引守護魔皆除災可皆救邪見皆断及往昔權為者一有淮州城中

Or. 12380-3218 (K. K. II. 0266. k) の残経を解読すると、これが『仏頂心大陀羅尼経』巻下の関連する内容であると確定することができる。

忽然不見、此女人涙出如雨、而來礼敬菩薩、立即回家心、發誓願、變壳衣服、及別令請人写書千卷、加倍受持、未曾停止。若寿九十七歲、將死、所生已得秦国、得男身。若有善男子・善女人能書是三卷經典、以五種雜絹為袋、装彼經典、放仏寺院中、乃至隨身供養者、此人若坐若臥、有恐懼疑惑時、有彼百千那羅延金剛密跡大力及有無辺阿吒鉞・拘羅神、身持劍輪、随所在各処守護、有魔皆除、災皆可救、邪見皆断。(忽然として見ず、此の女人涙出すこと雨の如し、而して来りて菩薩に礼敬し、立即ちに家心を回し、誓願を發し、衣服を變売し、及び別に人に請いて千巻を写書せしめ、受持を加倍して、未だ曾て停止せず。若し寿九十七歳にして、將に死せんとせば、生ずる所、已に秦国を得て、男身を得。若し善男子・善女人の、能く是の三巻の經典を書し、五種の雜絹を以て袋と為し、彼の經典を装いて、仏寺院の中に放ち、乃至、身に随って供養せば、此の人、若しは坐し若しは臥すに、恐懼し疑惑する時有り、彼の百千の那羅延金剛・密跡の大力有り、及び無辺の阿吒鉞・拘羅神有りて、身に劍輪を持ち、所在各処に随って守護して、魔皆な除き、災い皆な救う可く、邪見皆な断つこと有り。)



Or.12380-3218 (K.K.II.0266.k) 佛經

現在、英蔵黒水城文献を検索してみると、残存する15編が西夏語『仏頂心観世音菩薩陀羅尼經』であり、三卷分の内容が基本的に保存されている。写本もあれば、刊本もあり、巻軸装・経折装・蝴蝶装などの異なる装幀の形式に分かれる。『英蔵黒水城文献』において、ただOr. 12380-2102RV (K. K. II. 0243. e)、Or. 12380-3025 (K. K. II. 0234. b)、Or. 12380-3875 (K. K.)だけが正しい名称を与えられているが、その他のテキストの名称の誤りを改めて、西夏語と漢語の『仏頂心大陀羅尼經』の内容を比較すると、西夏語と漢語の内容は基本的に一致しており、わずかに若干の用語の相違が存在しているだけである。これは西夏語のテキストが漢語のテキストに基づいて翻訳されて成立したことを示している。西夏の地に残存する西夏語・漢語の『仏頂心大陀羅尼經』を研究するために、貴重な資料を提供している。

2. 『仏頂心大陀羅尼經』の内容の由来

『仏頂心陀羅尼經』（三卷）は疑偽經であり、主に観音信仰によって、十悪・五逆罪を滅し、闍提を誹謗し、病を治癒し分娩を促し、身口意の業を

取り除くことができることなどを説き、また女が男の体になり、父母の恩に報いて地獄に墮ちることなく、病を除き寿命を延ばして西方極楽浄土に往生するという願望を実現することができるとする。その意味は観音信仰の功德を宣揚することにある。

仏教は人間の生に関心を持つ宗教である。中国に産まれた疑偽経は正統な仏教經典に基づいて成立したものでもあり、正統な經典の流伝の過程における革新と発展でもある。疑偽経は簡潔で理解も修行もしやすく、信徒の日常生活と現世利益とに密接に関係づけている。『仏頂心大陀羅尼經』は観音の救苦救難という正統な經典と密接な関係がある。以下に、『仏頂心大陀羅尼經』と正統な經典との関係について簡単に整理する。

(一) 『仏頂心大陀羅尼經』の内容の由来

『仏頂心大陀羅尼經』（卷上）の中の

爾時、觀世音菩薩白釈迦牟尼仏言：以我前身不可思議福德因縁、欲令利益一切衆生、發大悲心、能断一切結縛、能滅一切恐怖、一切衆生依此威神功悉能離苦解脱。

（爾の時、觀世音菩薩は釈迦牟尼仏に白して言わく、我が前身の不可思議の福德因縁を以て、一切衆生を利益せしめんと欲して、大悲心を發し、能く一切の結縛を断じ、能く一切の恐怖を滅し、一切の衆生、此の威神の功に依りて悉く能く苦を離れ解脱す。）

という内容と、唐・智通訳『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』の中の

爾時、觀世音菩薩摩訶薩白仏言：世尊、是我前身不可思議福德因縁、今蒙世尊与我授記、欲令利益一切衆生、起大悲心、能断一切繫縛、能滅一切怖畏。一切衆生蒙此威神、悉離苦因獲安樂果。

(爾の時、觀世音菩薩摩訶薩は仏に白して言わく、世尊よ、是れ我が前身の不可思議の福德因縁なり、今、世尊は我と与もに授記を蒙り、一切の衆生を利益せしめんと欲し、大悲心を起こし、能く一切の繫縛を断じ、能く一切の怖畏を滅す。一切の衆生は此の威神を蒙りて、悉く苦を離れ、因りて安樂の果を獲。)

という内容は、ほぼ同じである。

『仏頂心大陀羅尼經』(卷上)の中の

爾時、觀世音菩薩重白釈迦牟尼仏言：我今欲為苦惱衆生滅除魔障，救遇苦衆生令無災，以自在王智印大陀羅尼法救濟一切受苦衆生，滅除一切疾病，令離惡業重罪，速成就一切諸善智，能滿足一切心願，利益安樂一切衆生，閉障煩惱。惟願慈悲，求尋樂說。

(爾の時、觀世音菩薩は重ねて釈迦牟尼仏に白して言わく、我れ今、苦惱の衆生の為めに魔障を滅除し、遇苦の衆生を救いて災無からしめんと欲し、自在王智印大陀羅尼の法を以て一切の受苦の衆生を救濟し、一切の疾病を滅除して、悪業の重罪を離れ、速かに一切の諸の善智を成就し、能く一切の心願を満足し、一切の衆生を利益安樂し、煩惱を閉障せしむ。惟だ願わくば、慈悲もて、樂說せんことを求尋す。)

という内容と、唐・伽梵達摩訳『大悲心陀羅尼經』の

世尊！ 我有大悲心陀羅尼呪，今当欲說。為諸衆生得安樂故，除一切病故，得寿命故，得富饒故，滅除一切惡業、重罪故，離障難故，增長一切白法諸功德故，成就一切諸善根故，遠離一切諸怖畏故，速能滿足一切諸希求故。惟願世尊，慈哀聽許。

(世尊よ、我れに大悲心陀羅尼呪有り、今、当に説かんと欲すべし。諸衆生、安樂を得んが為めの故に、一切病を除くが故に、寿命を得る

が故に、富饒を得るが故に、一切の悪業・重罪を滅除するが故に、障難を離るるが故に、一切白法の諸の功德を増長するが故に、一切の諸の善根を成就するが故に、一切の諸の怖畏を遠離するが故に、速かに能く一切の諸の希求を満足せんが故なり。惟だ願わくば、世尊よ、慈哀もて聴許せんことを。）

という内容は類似している。

『仏頂心大陀羅尼經』の中に

若復有女人，厭女人身，欲得男身者，將至百歲命終時，欲往西方淨土蓮花化生者，応請多人書写此陀羅尼經典，敬仏前面，以妙香花毎日供養不斷，必定女身轉成男子身。

（若し復た女人有り、女人の身を厭い、男身を得んと欲さば、將に百歲に至りて命終せん時、西方淨土に往きて蓮花化生せんと欲する者、応に多人に此の陀羅尼經典を書写せんと請い、仏の前面に敬い、妙香の花を以て毎日供養すること不斷なるべくして、必ず定めて女身もて轉じて男子の身を成ず。）

とあり、対応する内容は『大悲心陀羅尼經』の中にも現れている。対応する經文は以下の通りである。

若諸女人，厭賤女身，欲成男子身，誦持大悲陀羅尼章句，若不轉女身成男子身者，我誓不成正覺³⁶。

（若し諸の女人、女身を厭賤し、男子の身を成ぜんと欲さば、大悲陀羅尼の章句を誦持し、若し女身を轉じて男子の身を成ずることなくば、我れ誓いて正覺を成ぜず。）

『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』の対応する内容は以下の通りである。

若有善男子善女人，於晨朝時日三時，各誦一遍者，即與種種供養十億諸仏無有異也，永不受女身，命終之後永離三塗，即得往生阿彌陀仏国³⁷。

(若し善男子・善女人有りて、晨朝の時に於いて日に三時、各おの一遍を誦せば、即ち種種に十億の諸仏を供養すると異有ること無きなり。永く女身を受けず、命終の後、永く三塗を離る。即ち阿彌陀仏国に往生することを得。)

以上のことから、『仏頂心大陀羅尼經』卷上の対応する内容は、程度の違いはあるが『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』『大悲心陀羅尼經』などの影響を受けているとわかるであろう。

(二) 『仏頂心觀世音菩薩病治生催法經』

『仏頂心觀世音菩薩病治生催法經』卷中は、主に陀羅尼を読誦、供養し、あるいは書写することで、女性の難産を救い、病を除き寿命を延ばして、様々な病気・貧困・飢餓などを救うことができ、もし書写した陀羅尼を焼いて灰にして服に入れる、あるいは仏像を修造するならば、様々な病気を取り除くことができ、様々な願望をすべて実現させることができるだけでなく、命終してから、中陰に留まることなく、西方浄土に往生し、阿彌陀仏を見ることができると説く。

『仏頂心觀世音菩薩陀羅尼經』を読誦、供養すると、分娩を促し、難産を救うことなどが可能となるが、唐・智通訳『千眼前臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』にも次のように類似した内容がある。

又法，若有女人臨当産時，受大苦惱，呪酥二十一遍，令彼食之。必定安樂，所生男女具大相好，衆善莊嚴，宿植德本，令人愛敬，常於人中受勝快樂³⁸。

(又た法あり。若し女人有り、当に産まんとする時に臨みて、大苦惱

を受くるに、呪酥すること二十一遍せば、彼をして之れを食せしむ。必ず定めて安樂し、生ずる所の男女は大相好、衆善の莊嚴を具し、宿に徳本を植え、人をして愛敬せしめ、常に人の中に於いて勝れた快樂を受く。）

菩提流志訳『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼經』にも類似した次のような記述がある。

若有女人臨当産時受大苦惱。當呪酥二十一遍令彼食之。必定保命安樂產生。所生男女具大相好衆善莊嚴。宿植徳本衆人愛敬。常於人中受勝快樂³⁹。

（若し女人有り当に産まんとする時に臨まば大苦惱を受く。当に呪酥すること二十一遍せば、彼をして之れを食わせしむ。必ず定めて命を保ち、安樂に產生す。生ずる所の男女は大相好、衆善の莊嚴を具す。宿に徳本を植え、衆人愛敬す。常に人の中に於いて勝れた快樂を受く。）

義浄訳『薬師琉璃光七仏本願功德經』第三大願にも、

願我来世得菩提時，於十方界，若有女人，貪淫煩惱常覆其心，相續有娠，深可厭惡，臨当産時，受大苦惱；若我名字暫經其耳，或復称念，由是力故，衆苦皆除，捨此身已，常為男子，乃至菩提⁴⁰。

（願わくば、我れ来世に菩提を得る時、十方界に於いて、若し女人有り、貪淫の煩惱もて常に其の心を覆い、相續して娠有り、深く悪を厭い、当に産まんとする時に臨んで、大苦惱を受くる可し。若し我が名字、暫らく其の耳を經、或いは復た称念せば、是の力に由るが故に、衆苦は皆な除き、此の身を捨て已わりて、常に男子と為り、乃ち菩提に至る。）

と説かれる。

女性が子どもを生むことに注目すること、女の体が男の体に転化することに注目することは、多くの経典で明らかにする内容である。仏教は人の生老病死に注目している。昔は医療水準が低く、人民に医者も薬も足りなかったため、多くの病気は治療するすべがなく、人々の命を脅かした。女性の妊娠・出産の危険はより大きいものであり、人々は『仏頂心大陀羅尼経』を読誦・書写・供養して、妊婦・母子の平安を保護することができるように望んだ。

黒水城文献の中には、西夏語・漢語の『仏頂心観世音菩薩病治生催法経』だけでなく、さらに『聖六字増寿大陰王陀羅尼経』（第235号、館冊第570号）の発願文の中において、女の発願者の嵬口移氏が財を寄付して経文を写すことに言及している。その目的は彼女の善行が菩薩に彼女の身内を保護させ、彼女の娘たちを保護させることができるように望むことである。題記の中には、Гхиэ Нин-лдиэ「猪年八月六日の夜に分娩する」、Гхиэ Гхиэ-лхон「牛年五月二十七日夜に分娩する」とある。ここには明らかにこの経文を読誦する目的が、彼女の身内が幸福で安らかであるように守護しようとするものであることを示している。

敦煌文献の中で『仏頂心観世音菩薩病治生催法経』以外に、さらにS. 1441vb、S. 1441vk、S. 5561、S. 5593b、S. 5957などの『患難月文』とP. 4514『救産難陀羅尼』などがあり、その中のS. 1441vbの首題には、

以茲捨施功德、念誦焚香，総用莊嚴、患産即体、惟願日臨月満，果生奇異之神、母子平安，定無憂嗟之厄。観音灌頂，得受不死之神方；薬上捫磨，垂恵長生之味。母無痛惱，得昼夜之恒安、産子仙童，似披連蓮而化現⁴¹。

（茲の捨施の功德を以て、念誦し香を焚き、総じて莊嚴を用い、患産は体に即す。惟だ願くば日臨み月満ち、果生奇異の神、母子は平安にして、定めて憂嗟の厄無し。観音の灌頂もて、不死の神方を受くるを

得。葉上の捫磨、垂恵長生の味なり。母に痛惱無く、昼夜の恒安を得て、産子の仙童、連蓮を披きて化現するに似る。）

とある。以上のことから、女性の出産は人の生命に関するものであり、古代において世の人の関心を大いに集めたとわかるだろう。

(三) 『仏頂心観世音菩薩前往難救経』

『仏頂心観世音菩薩前往難救経』巻下は主に四つの観音信仰の靈驗譚を説いている。そのうち二つは国外で起こり、二つは中国で起こったものである。第三巻の靈驗譚は前述の経文とたがいに呼応し、經典の流行を押し進めた。

第一則の靈驗譚は、罽賓国で瘟疫が流行し、感染した者は一兩日で死んだが、観世音菩薩が慈悲の心によって、白衣の居士として化現し、自ら病の人を治して救うだけでなく、さらに人に『仏頂心大陀羅尼』（三巻）を書写し、真心から供養することを教えると、人を救い命を長らえることができ、さらに災難を取り除くことができる、と説く。

『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』はどのように陀羅尼を用いて病気を防ぐかという内容について次のように記述している。

若有疫病流行，当作四肘水曼荼羅，取好牛酥，呪一百八遍火中烧之，一切災疫悉皆消滅。又取酥少分与疫病人食之，立即除愈。昔罽賓国有疫病流行，人得病者，不過一二日並死。有婆羅門真諦起大慈悲心，施此法門救療一国，疫病应時消滅。時行病鬼王，应時出離国境，故知有驗耳⁴²。

（若し疫病の流行有らば、当に四肘水曼荼羅を作り、好牛の酥を取りて、一百八遍呪して火の中に之れを焼かば、一切の災疫は悉皆く消滅すべし。又た酥を取りて少分もて疫病の人に与えて之れを食さば、立即ちに除愈す。昔、罽賓国に疫病の流行有り、人の病を得る者は、一二日

を過ぎずして並びに死す。婆羅門真諦有り、大慈悲心を起こして、此の法門を施し一国を救療せば、疫病は応時に消滅す。時に行病の鬼王は、応時に国境を出離す。故に驗有ると知るのみ。）

類似の内容としては唐・善提流志訳『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼經』にも次のような記述がある。

若有方邑疫病流行，当作四肘水曼拏羅，取好牛酥，呪一百八遍，乃持一呪一燒，滿一千八遍者，即得一切災疫悉皆消滅。又取酥少分与疫病人食之，隨即除愈。昔罽賓国乃疫病流行，人有得病不過一二日即以命終。有婆羅門真帝起以大慈，施此法門，救療一國疫病之者，応時銷滅，其行病鬼応時出国，当知驗耳⁴³。

（若し方邑に疫病流行すること有らば、当に四肘水曼拏羅を作り、好牛の酥を取り、一百八遍を呪すべし。・乃ち一呪一焼を持ち、一千八遍に満ちれば、即ち一切の災疫悉皆く消滅することを得。又た酥を取り少分もて疫病人に与え之れを食さば、隨即に除愈す。昔、罽賓国に乃ち疫病流行し、人の病を得る有らば一二日を過ぎずして即ち以て命終す。婆羅門真帝有り、起すに大慈を以てし、此の法門を施し、一國の疫病の者を救療せば、応時に銷滅し、其の行病の鬼は応時に国を出ず。当に知るべし、驗あるのみ。）

『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼經』と『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪經』とは同本異訳であり、ただ唐訳本の中の「婆羅門真諦」が疑偽経の中で「観世音菩薩」に改められたにすぎない。

二番目の靈驗譚は波羅奈国で起こった。主に陀羅尼を読誦・書写・供養して病を除き寿命を延ばすという功德を説く。この靈驗譚は唐・智通訳『千眼前臂観世音菩薩陀羅尼神呪經』にある程度見出すことができる。

昔波羅柰国有一長者，唯一子，寿年合得十六。至年十五有一婆羅門巡門乞食，見其長者愁憂不樂，夫妻憔悴，面無光沢。婆羅門問曰：長者何為不樂？長者説向因縁。婆羅門答曰：長者不須愁憂，但取貧道処分，子得寿年長遠。於時婆羅門作此法門一日一夜，得閻羅王報云：長者其子寿年只合十六，今已十五，唯有一年。今遇善縁得年八十，故來相報。爾時長者夫妻歡喜踴躍，罄捨家資，以施仏法衆僧。當知此法不可思議具大神驗。以曾入大都会三曼荼羅金剛大道場者，不須作曼荼羅，唯結印誦呪，無願不果，速当成仏⁴⁴。

(昔、波羅柰国に一長者有り。唯だ一子有り、寿年は合して十六を得。年十五に至るに一婆羅門の巡門乞食するもの有り、其の長者の愁憂不樂し、夫妻憔悴し、面に光沢無きを見る。婆羅門問うて曰わく、長者よ、何ぞ不樂為るや。長者は向きの因縁を説く。婆羅門答えて曰わく、長者よ、須らく愁憂すべからず、但だ貧道の処分を取れば、子は寿年の長遠なるを得。時に於いて婆羅門は此の法門を作すこと一日一夜にして、閻羅王の報を得て云わく、長者よ、其の子の寿年は只だ合して十六なるも、今、已に十五にして、唯だ一年有るのみ。今、善縁に遇いて年八十なるを得。故に相報來る。爾の時、長者夫妻は歡喜踴躍し、罄く家資を捨て、以て仏・法・衆僧に施す。當に知るべし。此の法は不可思議にして大神驗を具するを。以て曾て大都会三曼荼羅金剛大道場に入れば、須らく曼荼羅を作るべからず、唯だ印を結び、呪を誦え、無願不果にして、速かに當に仏と成るべし。)

菩提流志訳『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼經』にも次のようにある。

昔、波羅柰国有一長者，唯一子，寿年只合十六。至年十五，長者夫妻愁憂憔悴，面無光沢。有婆羅門巡門乞食，遇見長者問曰：何謂不樂？長者具上説其因縁。婆羅門答言：長者不須愁憂，但取貧道処分法門，子得寿年長遠無夭。於時婆羅門作此法門，滿七日夜，得閻羅王報云：

長者其子命根只合十六，今已十五，惟有一年。今遇善縁得年八十，故來相報。爾時長者夫妻歡喜踴躍，罄捨家資，施仏法僧，當知此法不可思議具大神驗。先已曾入都會三曼拏羅金剛大道場者，不須作大曼拏羅。唯作水壇結印誦呪，無願不果，速当成仏⁴⁵。

(昔、波羅奈国に一長者有り。唯だ一子有り、寿年只だ合して十六なり。年十五に至り、長者夫妻愁憂し憔悴して、面に光沢無し。婆羅門の巡門乞食する有り、長者に遇見して問うて曰わく、何ぞ不樂と謂うや。長者は具さに上に其の因縁を説く。婆羅門答えて言わく、長者よ須らく愁憂すべからず。但だ貧道処分法模を取らば、子は寿年の長遠無天なるを得。時に於いて婆羅門は此の法門を作して、七日夜を満ち、閻羅王の報を得て云わく、長者よ、其の子の命根は只だ合して十六なり。今、已に十五にして、惟だ一年有るのみ。今、善縁に遇いて年八十を得。故に相報来る。爾の時、長者夫妻は歡喜踴躍し、罄く家資を捨て、仏・法・僧に施す。當に知るべし、此の法の不可思議にして大神驗を具することを。先に已に曾て都會三曼拏羅金剛大道場に入る者は、須らく大曼拏羅を作るべからず。唯だ水壇を作りて印を結び呪を誦え、無願不果にして、速かに當に仏と成るべし。)

以上のことから、『仏頂心觀世音菩薩陀羅尼經』の関連する内容は、『千眼前臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』、『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼經』の内容に基づいて、正統な經典のなかの「婆羅門」を「觀世音菩薩」に改め、長者の子の寿命を「八十歳」から「九十歳」に改めただけであるとわかるだろう。

三番目の靈驗譚は、主に、ある婦人が三生前にある人を毒殺し、このために互いに怨みを懷き、仇があだを討とうして、三度、生まれ変わり、その母を殺したが、婦人は常に『仏頂心大陀羅尼經』を持っていたので、仇のあだ討ちが実現しなかったことを説く。觀世音は一人の僧に化現して救済し、たがいに怨みを解き、このために婦人は発願して、さらに敬虔な心

で仏を敬い、陀羅尼を敬い供養して、寿命を九十七歳にまで延ばして、命終して秦国に転生し男の体となった。仇は觀世音菩薩の頂礼の授記を受けた。

四番目の靈驗譚は、一人の役人が懷州に行き県令に就任したが、旅費がなくなったため、泗州普光寺の常住に錢百貫を借り、寺院の住持は一人の沙弥を遣わし、懷州で借金を返してもらったことを説く。途中で役人の心に悪意が生じ、財のために命を狙い、沙弥を袋の中に入れ、川に投げ入れた。沙弥は身に陀羅尼三巻を携帯していたので、少しも被害を受けることなく、暗い道のなかで人を導くように懷州に導かれ、官府の大堂に至った。役人は由来を知ったあと、またこの陀羅尼を敬い供養すると、大きな功德を得て、県令から刺史に就任した。

以上のことから、『仏頂心大陀羅尼經』は正統な經典との関係が密接であり、その内容は唐・智通訳『千眼前臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』と唐・菩提流志訳『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼經』に由来しており、さらに多くの中国的特色が溶け込み、より中国人の生活習俗に合致しているとわかるだろう。特に四つの觀音の靈驗記は、『千眼前臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』あるいは『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼經』が流布させた感応記と見なすことができる。西夏語本の『仏頂心大陀羅尼經』(三卷)の中には、さらにタンゲート人の特色を備えた言葉を用いており、さらにその民族の信徒の要求と合致している。異なるテキストで用いる言葉に違いがあるかもしれないが、信徒が求める現世利益と多くの願望に変化はなく、仏教の信仰の世俗化・民衆化を反映している。これもまた疑偽經が無限の生命力を持つことの重要な鍵である。

3. 西夏語『仏頂心大陀羅尼經』の翻訳年代

漢語『仏頂心大陀羅尼經』には作者と年代はなく、鄭阿財は敦煌文献のその他のいくつかの手がかりに基づき、この經の成立年代が中唐であると

推定している⁴⁶。その後、『仏頂心大陀羅尼經』は次第に流布し、敦煌・トルファン文献、黒水城文献、遼応県木塔、遼金房山刻経いずれにおいても残されている。

(二) 『仏頂心大陀羅尼經』の西夏への流入

西夏語の仏経は主に宋から購入した仏経に由来しており、西夏は前後に六回、宋に馬を献じ仏経を購入している。第一回目は、天聖九年（1031）に徳明が馬七十頭を献じて、仏経一藏を与えることを求め、仁宗はこれにしたがった。第二回目は、景祐二年あるいは夏光運二年（1035）に元昊が使者を使わして馬五十頭を献じて、仏経一藏を求め、仁宗は特別にこれを与えた。第三回目は、福聖承道三年（1055）に、諒祚が使者を使わし入貢し、仁宗は『大藏經』を与えてこれを慰めた。第四回目は、禪都二年（1058）に、諒祚が馬七十頭を献じて印造の工賃にあて経を与えることを求めた。第五回目は、禪都六年（1062）に、諒祚が再び馬七十頭を献じて経を購入している。第六回目は、天賜礼盛国慶四年（1073）に、秉常が馬を献じて経を求め、これを与えられ、さらにその馬を還されている⁴⁷。

西夏が馬を献じて宋に対して求めた仏経とは、入藏經典のことであろう。よって、疑偽経としての『仏頂心大陀羅尼經』が公式な要請のルートによって伝わったという可能性は大きくはない。これ以外に、西夏は河西地区で流行した仏経を直接的に継承している。あるいは宋・夏・遼・金代に民間での相互交流と密輸などのルートによって夏の領域に流入し、宋代に禁止された『占察善業經』のように黒水城文献のなかで保存されてきたのかもしれない。

宋・遼・金代に『仏頂心大陀羅尼經』は比較的流行しており、上海図書館蔵823825号『仏頂心大陀羅尼經』の南宋の残本一件、山西応県木塔残存の遼代の『仏頂心大陀羅經』⁴⁸、北京房山雲居寺房山石経の中の金代の皇統三年（1143）刻石や金代で刻石年代が表記されていない『仏頂心大陀羅經』三巻などがある。その中の遼代応県木塔は遼・清寧二年（1056）に建

立されており、塔の中から発見された経典は、清寧二年（1056）以前、あるいは塔の竣工と同時期に書写された、あるいは刻印が完成したものであろう。これは道宗以前に『仏頂心大陀羅尼經』が遼の領域内で非常に流行していたことを物語っている。『仏頂心大陀羅尼經』が遼から伝入したかどうかについて明確な記録はない。

しかし、継遷は酋豪と遼との婚姻関係を結ぶ政策によって、徐々に発展して大規模になり、ついに咸平元年（998）には銀・夏・綏・宥・静の五州を改めて獲得した⁴⁹。遼・景福二年（1032）の元昊の時代には、また遼代公主を娶っており、『遼史』には「是の歳、興平公主を以て夏国王・李徳昭（応に李徳明と為すべし）の子の元昊に下嫁し、元昊を以て夏国公、駙馬都尉と為す」と記載されている⁵⁰。乾順の時代には再び遼に対して尚公主を求めた。『遼史』巻26「道宗本紀」にはさらに、「戊子、夏国王李乾順、使を遣わして尚公主を請う」とある。『遼史』巻27「天祚本紀」にも「（乾統二年）丙午、夏国王李乾順、復た使を遣わして尚公主を請う」とある。その後、（乾統三年）六月辛酉に、夏国王李乾順は再び使を遣わして尚公主を求め、（乾統五年）三月壬申には、同族の娘の南仙を成安公主に封じ、夏国王李乾順の嫁とし、（乾統八年）壬寅になって、夏国王李乾順は成安公主の子どもを、使いに遣わしてきた⁵¹。夏・遼の二国の婚姻関係は互いの関係を密接にただけでなく、また両者の宗教・文化の交流を促進した。拱化五年（1067）と天祐民安五年（1095）に、諒祚と乾順は遼との関係を発展させるために先後に2回、遼に対してウイグル人僧と翻訳した経文を献上している。咸雍三年（1067）冬十一月壬辰には、夏国は使者を遣わしてウイグル人僧・金仏・梵覚経を献上し⁵²、天祐民安五年（1094年）の乾順の時代に、西夏は再び遼に対してウイグル人僧と翻訳した仏経を献上した。更に寿隆元年（1095）甲申には、夏国は貝葉の仏経を献上した⁵³。遼・夏の文化交流は仏教経典の伝播を促進したのである。

疑偽経『仏頂心大陀羅尼經』は敦煌・トルファン文献のいずれにも残されている。たとえばP. 3236、P. 3916f、P. 3916などがある。張騫が西域を

切り開き、陸路のシルクロードを開拓して以来、仏教は常に河西回廊を経て中国に伝入し、敦煌は中国語文化の交差する地となった。仏教が盛んになると、訳経、造像の開窟は千余年間、継続された。五代・宋初は河西地区に涼州のトルファン、甘州のウイグル、瓜・沙州の帰義軍などの政権が存在したが、仏教は依然として盛んであった。宋・天聖六年（1028）になると、元昊は甘州を占領し、宋・明道元年（1032）にはさらに涼州を占拠して、景祐三年（1036）には瓜・沙・肅の三州を攻め取った。すなわち、元昊は正式に皇帝を称する以前に、すでに河西地区を治めていたのである。西夏の統治者は仏教を尊崇する政策を採用しており、仏教は西夏時代において継続的に発展することができたので、『仏頂心大羅尼経』は河西と遼から流伝して西夏に至ったという可能性がかなり高い。大体の時期は、西夏が河西を占領した時期か遼・道宗前後に、西夏の領内に伝わったのであろう。

（三）西夏語『仏頂心大陀羅尼経』の翻訳年代

『仏頂心大陀羅尼経』はいつ西夏語に翻訳されたのか。イギリス所蔵の黒水城文献に残る西夏語『仏頂心大陀羅尼経』は欠落が酷く、年代と訳経者の記述がない。ロシア所蔵黒水城文献の西夏語『仏頂心大陀羅尼経』（西夏特蔵第132号、館冊第116号）は経題の後に、「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」（講経論律の沙門法律、敕に依りて訳す所Циэ Ндзие Фалюй）と、勅命により訳すとあり、館冊第6535号に残る上巻の刊本の経折装の経題の後にも、「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」（講経論律の沙門法律、敕に依りて訳す所Циэ Ндзие Фалюй）と、勅命により訳すとある。

講経論律の沙門・釈法律は西夏の僧であり、西夏語に精通していて、『仏頂心大陀羅尼経』（三巻）を西夏語に翻訳したのであろう。しかし西夏語のその他の文献の中に講経論律の沙門法律の存在はなく、法律法師の生没年については全く知りようがない。

ロシア所蔵西夏語館冊第4357号は、下巻の『仏頂心觀世音菩薩前往難救

105号は刊本の経折装で、各折は6行、各行は14字である。館冊第2900号は刊本の経折装で、各折6行、各行14字である。館冊第7053号は刊本の経折装で、各折は6行で、各行は14字である。館冊第3820号は刊本の経折装で、各折は6行、各行は14字である。館冊第6535号は刊本の経折装で、各折は6行、各行は14字である。イギリス所蔵西夏語『仏頂心大陀羅尼經』Or. 12380-0050 (K. K. II. 0283. ggg) は刊本の経折装であり、各折は6行、一行は14字である。Or. 12380-2944 (K. K. II. 0265. e) 号残経は刊本の経折装で、各折は6行、一行は14字である。Or. 12380-2943RV (K. K. II. 0272. h) 号残経は刊本の経折装であり、各折は6行、一行は14字である。Or. 12380-2761 (K. K. II. 0255. j) 号残経は刊本の経折装であり、各折は6行、一行は14字である。Or. 12380-3185 (K. K. II. 0265. d) 号残葉は刊本の経折装であり、1折6行が残り、一行は14字である。

黒水城に残る刊本の経折装は宋代の経折装の影響を受けたのだろう。経折装は宋代の福州東禪等覺院刊刻の『崇寧藏』から始まった。この彫刻は北宋・元豊三年(1080)以前から、政和二年(1112)まで行われた。その装幀の形式は宋の『開宝藏』と遼の『契丹藏』の巻軸装を経折装に改め、各折5行あるいは6行で、各行は17字である。経折装は西夏に伝わった後、紙の原因のために版式が変化した。

西夏が受用し採用した刊本の経折装の装幀は、『崇寧藏』の刊行・印刷が終わった後、つまり政和二年(1112)、西夏の貞観十二年以後であるはずである。貞観は西夏の乾順皇帝の年号であり、十三年間(1101~1113)に及んだ。これもまた、『仏頂心大陀羅尼經』が西夏語に翻訳、刊刻されたのが乾順皇帝から仁孝皇帝の間であることを物語っているだろう。国家図書館蔵の西夏語『過去莊嚴劫千仏名經』の発願文には、元昊の戊寅(1038~1048)から乾順の民安(1090~1097)初年まで、五十三年の時間をかけて前後に大小の三乗・半満の法を翻訳し、すべてに昌伝があり、362帙、812部、3579巻が完成したと記されている。西夏の乾順皇帝の時代には西夏づの訳経が最高潮に達し、大量の經典が主に乾順以前に西夏語に翻訳さ

れ、その後の仁孝の時代は、翻訳は少なかったが、仏教の校勘が多く行われた。こうした状況を踏まえると、さらに西夏語『仏頂心大陀羅尼經』が乾順時代に翻訳され、その後に西夏全域に流布したと確定することができる。

以上をまとめると、本稿は、まずイギリス所蔵の黒水城西夏語『仏頂心大陀羅尼經』に対して復元、翻訳、解釈を行ない、經典の同定を行ない、あるいは誤った名称を訂正した。この翻訳と解釈に基づいて、この疑偽經の内容は主に唐・智通訳『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』、唐・菩提流志訳『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼經』、唐・伽梵達摩訳『千手千眼觀世音菩薩廣大円満無碍大悲心陀羅尼經』に基づいており、千眼千臂觀世音菩薩信仰が流布した記録と見なすことができると考察した。遅くとも乾順の時代には西夏語に翻訳され、漢語・西夏語テキストの異なる版が西夏国内に伝播した。

【注】

※本稿は2018年度国家社会基金重大特別プロジェクト：マイナーな「失われた学問」と各国史等の研究（認証番号2018VJX009）による研究部分的成果の一部である。

- 1 敦煌文献には、P. 3239、P. 3916が残っており、上・中・下の三巻に分かれる。すなわち『仏頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』巻上、『仏頂心觀世音菩薩療病催産方』巻中、『仏頂心觀世音菩薩救難神驗經』巻下である。
- 2 山西応県木塔出土遼代写本巻軸装『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』。
- 3 金・皇統三年（1143）石刻『佛頂心觀世音菩薩大陀羅尼經』三巻と金・刻石年代のない三巻が残る。
- 4 牛汝極は、トルファン文献センターとロシア・サンクトペテルブルク東洋学研究所のクロトコフ蔵品のなかに、いくつかのウイグル語写本と版本の『佛頂心大陀羅尼經』があり、すべて同一の訳本であって、ウイグル語の版本は明代の重版本であるかもしれないとする。牛汝極「敦煌吐魯番回鶻漢訳疑偽經」、『敦煌学輯刊』2000年第2期を参照。
- 5 「第130, 佛頂心觀世音菩薩, И Н В. №105, 908, 2827, 2900, 5478,

5693. 第131, 仏頂心観世音菩薩患医生断法経, *И Н В.* №3820, 7786. 第132, 仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経, *инв.* №116, 2827. 第133, 仏頂陀羅尼経, *инв.* №57, 4357, 4880, 4887, 4978, 5150。〔ロシア〕エヴゲーニイ・クチャーノフ編著、白濱訳『西夏文写本和刊本』（ロシア語版, 1963年）、中国社会科学院民族研究所歴史研究室資料グループ編訳『民族史訳文集』（3）、1978年、第34頁を参照。
- 6 E. И. Кычанов. *Каталог тангутских буддийских памятников.* Москва : Университет Киото. 1999г. стр. 467-471.
- 7 張九玲「西夏本『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経』述略」、『寧夏社会科学』2015年第3期。
- 8 張九玲「『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経』の西夏訳本」、『寧夏師範学院学報』2015年第1期。
- 9 大英図書館・西北第二民族学院等編『英蔵黒水城文献』（第2冊）、上海：上海古籍出版社、2005年、第333頁。
- 10 ロシア所蔵黒水城西夏語館冊第105号に「𐽳𐽲」（若）はない。
- 11 イギリス所蔵Or. 12380-2102RV (K. K. II. 0243. e) の残葉に「𐽳𐽲」（前）を欠く。
- 12 大英図書館・西北第二民族学院等編『英蔵黒水城文献』（第3冊）、上海：上海古籍出版社、2005年、第322頁。
- 13 西北第二民族学院・大英図書館等編『英蔵黒水城文献』（第4冊）、上海：上海古籍出版社、2005年、第36・51・198頁。
- 14 西夏語「𐽳𐽲𐽲𐽲」（高官を敕任する）は、漢語テキストでは「改めて懷州刺史に任ず」とある。
- 15 北方民族大院・大英図書館等編『英蔵黒水城文献』（第5冊）、上海：上海古籍出版社、2010年、第225-229頁。
- 16 西夏語「𐽳𐽲𐽲𐽲」（敕任高官）、漢文はもともと「改任懷州刺史」を用いる。
- 17 西北第二民族学院・大英図書館等編『英蔵黒水城文献』（第1冊）、上海：上海古籍出版社、2004年、第22頁。
- 18 西北第二民族学院・大英図書館等編『英蔵黒水城文献』（第2冊）、上海：上海古籍出版社、2005年、第28頁。
- 19 西夏語の「𐽳𐽲𐽲𐽲」（三善月）は、漢語では「三朝満月」を用いる。善月は一年の中の正月・五月・九月等などの三長齋月であり、この三か月の間に長齋・行を持つことを指す。善事は善月といい、また三善月という。西夏

語の表現はより仏教の本意に合致しているとわかるであろう。

- 20 西夏語の「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(天亦不樂地亦不許)は、漢語では「天不容、地不載」を用いる。
- 21 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第2冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第44頁
- 22 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第3冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第290頁。
- 23 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第3冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第290頁。
- 24 西夏語「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(災惡競生)について、漢語では「口舌競生」を用いる。
- 25 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第2冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第107頁。
- 26 西夏語「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(受敕)について、漢語は「上任」を用いる。
- 27 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第2冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第107頁。
- 28 西夏語「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(為官城主)について、漢語は「官人」を用いる。下の文の中に直接的に西夏語の「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(城主)を用いる。「城主」には西夏の特徴が備わる。『天盛律令』においてしばしば見られる。
- 29 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第2冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第345頁。
- 30 西夏語「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(百千万苦)について、漢語は「百千万罪」を用いる。
- 31 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第3冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第219頁。
- 32 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第4冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第36頁。
- 33 西夏語「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(樓主家隣人)について、漢語のテキストは「東隣西舍」を用いる。
- 34 西北第二民族学院・大英図書館等編『英藏黒水城文献』(第4冊)、上海：上海古籍出版社、2005年、第51頁。
- 35 西夏語「𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿」(以五色染絹)、漢語は「以色雜彩」を用いる。
- 36 (唐) 伽梵達摩訳『千手千眼觀世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼經』、『大正藏』第20卷、第1060号、第107頁上16行。
- 37 (唐) 智通訳『千眼前臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』 卷下、『大正藏』第20卷、

- 第1057b、第94頁下1行。
- 38 (唐) 智通訳『千眼前臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』卷下、『大正蔵』第20卷、第1057b、第93頁中10行。
- 39 (唐) 菩提流志訳『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼経』、『大正蔵』第20卷、第1058号、第101頁上23行。
- 40 (唐) 義浄訳『葉師琉璃光七仏功德本願経』、『大正蔵』第14卷、第451号、第410頁上29行。
- 41 敦煌研究編『敦煌遺書総目索引新編』、北京：中華書局、2002、第43頁。
- 42 (唐) 智通訳『千眼前臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』卷上、『大正蔵』第20卷、第1057b、第93頁中1行。
- 43 (唐) 菩提流志訳『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼経』、『大正蔵』第20卷、第1058号、第100頁下23行。
- 44 (唐) 智通訳『千眼前臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』卷上、『大正蔵』第20卷、第1057b、第93頁中10行。
- 45 (唐) 菩提流志訳『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼経』、『大正蔵』第20卷、第1058号、第107頁上7行。
- 46 鄭阿財「敦煌写本『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼経』研究」、『2000年敦煌学国際学術討論会文集』、蘭州：甘肅民族出版社、2000年、第8頁。
- 47 崔紅芬『西夏河西仏教研究』、北京：民族出版社、2010年、第193～198頁を参照。
- 48 『応県木塔遼代密蔵』（文物出版社、1991年、第56頁）に雑抄第64号、65号『仏頂心観世音菩薩大陀羅尼』巻軸装があるのを参照されたい。第64号は保存状態が比較的良く、わずかに末尾を欠くだけである。各紙15、16行で、一行に18、19字と等しくはない。撰者名はなく、その内容は多く唐・総持寺沙門智通訳『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』を改変したものである。文字が合致するだけでなく、遼代の僧侶が經典に附会して、療病・催産・救難の雑方として編集したのであろう。第65号と64号は同じ経の異なる写本である。
- 49 崔紅芬『西夏河西仏教研究』、北京：民族出版社、2010年、第22頁。
- 50 (元) 脱脱等撰『遼史』卷18「興宗本紀」(一)、北京：中華書局標点本、2000年、第213頁。
- 51 (元) 脱脱等撰『遼史』卷27「天祚皇帝本紀」(一)、北京：中華書局標点本、2000年、第319・320・321・324頁。

- 52 (元) 脱脱等撰『遼史』卷22「道宗本紀」(二)、北京：中華書局標点本、2000年、第267頁。
- 53 (元) 脱脱等撰『遼史』卷26「道宗本紀」(六)、北京：中華書局標点本、2000年、第308頁。
- 54 天盛18年3月14日は、火鼠年(1166年7月8日)である。
- 55 訳者(原著者)注：この「隨」(子、鼠)は誤りかもしれない。天盛十八年は丙戌の年であるはずだから西夏文字「隨」を「殲」(戌)に改めるべきである。
- 56 E. И. Кычанов. *Каталог тангутских буддийских памятников*. Москва : Университет Киото. 1999г. стр. 467-471.

A Research of Tangut *Fodingxin Avalokiteśvara Sutra*

CUI Hong fen

Fodingxin Avalokiteśvara Sutra is an apocrypha that gradually formed since mid-Tang Dynasty, it mainly propagates the merits of Avalokiteśvara and efficacious stories. This article focuses on No.105 *Fodingxin Avalokiteśvara Sutra* collected in Russia, references other fragmentary sutras to type-in and make correction. Then makes a comparison between the vocabularies used in Chinese edition, and form an integrated three volumes edition. Based on translation and interpretation, the article makes textual research of *Fodingxin Avalokiteśvara Sutra* through origin of the Tangut fragmentary sutras, the ways of introduction to Tangut and the time of the translation, and draws a conclusion that the apocrypha is introduced from Hexi region to Tangut, then translated into Tangut during the emperor Qianshun and Renxiao. The context of it mainly according to *Qianshouqianyan Avalokiteśvara Dharani* translated by Zhi Tong in Tang Dynasty, *Qianshouqianyan Avalokiteśvara Lao Dharani* translated by Putiliuzhi in Tang Dynasty and *Qianshouqianyan Avalokiteśvara Guangdayuanmanwuai Dabeixin Dharani* translated by Jiafandamo in Tang Dynasty, we can regard it as the circulation notes of *Qianshouqianyan Avalokiteśvara Dharani*.

崔紅芬氏の発表論文に対するコメント

索 羅寧*著・松森秀幸**訳

文献整理の部分について

本論文の主な内容は、1. テキストの処理と、2. 研究、という二つの部分に分かれる。論者は何編かのイギリス所蔵西夏語残片を整理し、文字の対照とロシア所蔵の資料との比較を行っている。最終的な考察の結論は、イギリス所蔵西夏語資料の中の12篇が『仏頂心大陀羅尼經』に属する新資料であるとしており、これはこれまで知られていないものであり、世界各地に所蔵される西夏テキストを整理するという仕事に対して一定の貢献をなしたといえることができる。

また、論者は関連する西夏文献の漢訳を提示している。テキストの処理は、かなり堅実であり、内容の大部分は正確な解説であって、結論もかなり明快であるといえることができる。論者のこの発見によって、これまでの西夏テキストに対する理解に、重要な補足と修正が加えられた。

テキスト研究の面における論者の考証の成果は受け入れることができるものであるが、論者が提示した漢語の翻訳については、その理由と出典が明らかではない。もし論者が西夏語文献の漢文の出典を校定するのであれば、関連する漢文の原文を提示し、その出典ならびに西夏語訳文との違いを明記するべきである。本稿での論者自身の翻訳は、あくまで参考にすぎず、論文の本文と見なすことはできない（サンスクリット語の原文・サンスクリット語の解釈・古代漢語訳・現代語訳とを並記する、サンスクリッ

*中国人民大学西域歴史語言研究所教授。

**創価大学比較文化研究所准教授。

ト語文献の整理研究を参考にすることができるだろう)。このように異なる言語のテキストの差異をあらわにすることができれば、西夏語と漢語の間の違いを議論することができる。

評者の理解によれば、両言語の差異は存在している。たとえば、西夏語訳テキストがいわゆる「城主」(西夏語の単語であり、「山主」などの語彙と関係があるはずである)を用いて漢語の「官人」を表すこと、文の中の西夏語の「処格」(locative)が漢語の「辺」の字と関係すると理解できることなどについては、すべてさらに議論が必要であるが、いずれも西夏人の理解を表しており、内容に影響しないけれども、注意すべきである。

論者の考察方法は、1. 西夏語の原文、2. 漢字への転写、3. 論者自身の漢訳というものである。つまり、本論文には、関連する漢語の記述との比較が欠けているのである。論文の導入部分において、この経の敦煌、遼の応県木塔などの版本の存在に言及し、他に張九玲の本文献に関する二篇の論文を提示しているが、方広鋸が早くに整理した黒水城出土の『仏頂心陀羅尼経』の漢語版に言及していないようである。

ご存知の通り、この資料は最も完成されたものであり、方教授はこの論文において西夏の漢語テキストと遼の房山石経との関係というテーマを提示している。いま問題としている西夏と遼仏教との関係に関する仮説に合致しており、研究する価値は大きい。この論文はすでに法鼓山の『電子大蔵経』に収録されており、たやすく利用することができる。また、西夏語には、いくつかの通仮字があるようであり、翻訳の時代と背景を判断する助けになるかもしれない。

研究部分について

論者が議論する内容には特色があるが、論文の最も重要な部分は、「『仏頂心大陀羅尼経』の西夏への流入」と「西夏語『仏頂心大陀羅尼経』の翻訳年代」という二つの節である。論者は、本経が西夏による六回に及ぶ北

宋からの大藏經購入のルートによって西夏に伝わったとすることはできないと指摘している。本經は民間の仏教信仰の資料であり、歴代の大藏經に収録されるものではない。このことは方広錫がすでに指摘している。

論者は本經の華北地域における流伝の状況が、遼・金時代の民間の仏教信仰と関連するという考えを提示しているが、これは正しいだろう（房山のテキストがあるからである）。遼・金・西夏の仏教の関係については、確かに11世紀から13世紀の華北仏教史の一つの重要な要素である。本經の西夏語訳文はこの仮説に対する一つの証拠とすることができる。

ただし、論者が論文において言及するのは西夏の景宗・崇宗らが遼に公主を求める慣例が仏教の発展と直接的な関係がないということである。評者は、以下のことを提案したい。論者は、さらに遼の高僧である通理恒策や善定等らの西夏語テキストと漢語版とが黒水城に存在していることを考慮するべきである（聶鴻音・馮国棟・索羅寧らの論文が参考になるだろう）。その上、法幢道啟の著作（『顯密円通成仏心要集』、『鏡心録』など）の西夏における流伝もある。『仏頂心陀羅尼經』は、西夏と遼・金、あるいは華北仏教全体に関係する代表的著作の一つに数えることができる。

すなわち、遼・西夏の仏教の関係は公的な仏教に限られるのではなく、民間信仰にも及んでいたことを表しているのである。西夏に伝わった年代を考えれば、遼の道宗の時期、あるいはさらに少し遅いであろう。論者も同じ考えであろうが、その理由は上述したものと異なっていたので、参考になれば幸いである。

『仏頂心陀羅尼經』の翻訳年代の問題は比較的容易に解決する。論者はロシア蔵の関連する文献の題記が、すべて天盛17年と18年、つまり1165年から1166年に属すると指摘する。また、その他の資料に別に「發願者」と「校勘者」の名が見られるが、すべて西夏の仁宗・天盛年間の人物である。論者が1165年以前にこの文献の西夏語の翻訳文がすでに存在していたと考察していることは受け入れることができる。

西夏の版本と宋代の異なる系統の大藏經体系との関係の問題については、

これまでのところ肯定的な結論を示すすべがないようである。一頁六行の組み版は西夏文献の間ではありふれたものであり、具体的な字数は、14字などというように一貫しているわけではない。羅炤教授との私的な交流によって、評者は、この組み版が遼代の民間の版本とつなげることができ、中原の大蔵経の版本の体系とは直接的な関係がないかもしれないことを知った。

ここでも、記録によれば、遼がこれまで『遼藏』を西夏に贈ったことはないということに注意しなければならない。しかし、この問題については、さらに多くの考証が必要である。

要するに、「イギリス所蔵西夏語『仏頂心大陀羅尼経』の翻訳・解釈と関連する問題」は、我々に一つの重要な研究資料を提供しているのであり、その内容を考察してゆけば、それによって論者はさらに多くの貢献をなすことができるかもしれない。

以上の内容を踏まえて、二つの質問がある。

1. この経が西夏に流伝したことは、遼・金の仏教の影響の痕跡と見なすことはできないか。
2. どの漢語テキストが、西夏語テキストに最も近いのか。房山のものか、敦煌のものか、あるいはその他の地域のものか。

索羅寧氏のコメントに対する回答

崔 紅芬*著・松森秀幸**訳

1. ご多忙のところ拙稿を詳細に読み、さらに拙稿に対して肯定的な意見とアドバイスを示してくださったことについて、索羅寧教授に感謝の意を示したい。

2. 「論者が提示した漢語の翻訳については、その理由と出典が明らかではない」とのコメントについて説明すると、『仏頂心陀羅尼經』は、黒水城に漢文テキストのTK-174、房山石經・敦煌藏經洞（3916号版本が比較的良い）にも漢文テキストが存在しており、私は西夏語テキストの翻訳の過程において、いくつかの版本を同時に参考にした。

3. 西夏語テキストが敦煌・房山などのどの版本に近いのかについては、現在のところ、しっかりと確定することはできない。方先生は房山石經本を参照しつつ西夏の方塔本のテキストを公表しているが、この版本には黒水城の漢文と個別の用語において違いが存在している。

たとえば方塔本あるいは房山石經本・応県木塔本・敦煌本では「無碍自在」とあるところが、TK-174本では「無量自在」であったり、敦煌本、黒水城の漢文テキスト、応県木塔本では「即說娑陀羅尼曰」とあるところが、方塔本では「即說娑陀羅尼呪曰」と加筆があったりする。

このような例は非常に多く、こうした状況については、ロシア所蔵本全体の刊行の終了を待ち、イギリス所蔵の西夏語テキスト・ロシア所蔵の西夏語テキスト・ロシア所蔵の漢文・敦煌の漢文・房山石經などといった系統を比較して考察するしかない。

*河北師範大学歴史文化学院教授。

**創価大学比較文化研究所准教授。

西夏人が仏教經典を西夏語に翻訳するときは、しばしばタンゲート人の風俗習慣と生活の特徴に結び付けて仏教經典の一部の内容について適当な調整と修正を行っている。このため、よりタンゲート人の特色と合致するのである。

4. 版本の問題に関して、イギリス所蔵本はかなり不完全であり、しっかりと確定することはできない。ロシア所蔵本全体が刊行された後に、ロシア所蔵の異なる版本とイギリス所蔵本を比較、あるいはロシア所蔵とイギリス所蔵の残葉を綴りあわせるなどするしかない。西夏の資料にはかなり欠落があり、いくつかの内容は考証が非常に困難である。

しかし西夏と遼との関係、黒水城文献の版本と応県木塔の版本との間には密切な関係が存在しており、西夏が遼と河西の影響を受けていたことは言うまでもないことである。

筆者は別稿の「山西応県木塔遺存遼代藏經再探析（山西応県木塔に遺る遼代藏經についての再考察）」において、学術界において対立が大きい応県木塔の一行15字の『大方広仏華嚴經』について考察した。応県木塔のなかの「2号・3号・4号の『大方広仏華嚴經』卷第24、26、51は唐・実叉難陀の訳であり、各紙は28行、一行15字で、上下に二重の枠線がある」。竺沙雅章は、「これまで宋代に一行15字がある藏經は発見されていない。このため、これがどの藏經の零本であるのかを確定することができない」と考えている。

宋においては一行15字の版式の仏教經典は発見されていないが、黒水城出土の西夏語と漢文文献においては、逆に数多くの一行15字の残經があり、また装幀の方法も非常に豊富である。ロシア所蔵黒水城漢文文献には西夏刻本巻軸装『華嚴經』（TK-88）（各紙28行、一行15字、上下に二重枠、潢楮紙）が遺っており、応県木塔の3つの『大方広仏華嚴經』（唐・実叉難陀訳、各紙28行、一行15字、硬黄紙）と、上下に二重の枠線あるという版式が非常によく一致している。さらに紙も基本的には一致している。

黒水城出土の漢文『華嚴經』は潢楮紙であり、遼代応県木塔は硬黄紙で

あるが、紙に潢が入ったら硬黄紙になる。伝世文献の記録では明らかではないけれども、出土文献は遼と西夏の関係を十分に説明しているのである。

5. 『仏頂心大陀羅尼経』は中国人が編纂した偽経と見なされており、サンスクリット語を参照することについては現実的ではないだろう。